

オープンキャンパス2022夏
日本語・日本文化学類 模擬講義

動物から読み解く日本文学

筑波大学人文社会系 助教 江口真規

本日の模擬講義の内容

1. 文学研究と動物:

アニマル・スタディーズの概要

2. 動物から読み解く日本文学:

夏目漱石『三四郎』に描かれた羊

自己紹介・研究紹介

- 専門分野: 文学
(日本近現代文学、比較文学)
- 興味・関心:
 - ・ 文学作品における自然や動物の表象
 - ・ 海外における日本文学の翻訳と受容
- 研究テーマ:
 - ・ 日本近現代文学における動物(特に羊)の表象
 - ・ アニマル・スタディーズ

自己紹介・研究紹介

- 担当科目（日本語・日本文化学類）：

AE53B51 日本の文学概論（1・2年次）

AE13G61 日本文学と自然（2年次）

AE13H91 世界文学と日本文学（2年次）

AE13H92 世界文学と日本文学演習Ⅰ（2年次）

AE13J12 世界文学と日本文学演習Ⅱ（3・4年次）

AE14A32 日本語・日本文化共同研究Ⅲ（2-4年次）

筑波大学で開講されている授業の内容については、KdBからシラバスを閲覧することができます。

👉 KdB（開設授業科目一覧） <https://kdb.tsukuba.ac.jp>


文学研究の方法と批評理論

文学を研究するための方法は、社会の動きと密接に関わり合っている?!

- ジャンル批評
 - 読者反応批評
 - 精神分析批評
 - 脱構築批評
 - フェミニズム批評
 - ジェンダー批評
 - クイア理論
 - マルクス主義批評
 - カルチュラル・スタディーズ
 - ポストコロニアル批評
 - エコクリティシズム
 - アニマル・スタディーズ
- 1950年代～
権利運動、〈他者〉表象の研究
 - ジェンダー批評
 - ポストコロニアル批評
 - エスニシティ研究
 - 1970年代～ 環境問題への視点
 - エコクリティシズム
 - 1980年代～ 動物の表象
 - アニマル・スタディーズ

アニマル・スタディーズ (Animal Studies)

動物と人間の関係や共生のあり方を考察する、
分野横断的な研究の枠組み。

- 人文学 (Humanities)
 - 社会科学 (Social Sciences)
 - 自然科学 (Natural Sciences)
- 
- 哲学、宗教学、生物学、獣医学、畜産学、法学、倫理学、
歴史学、社会学、人類学 (anthropology)、芸術、文学 等

アニマル・スタディーズのトピック

- 動物の権利 (animal rights)
- 動物の福祉 (animal welfare)
- 動物実験 (animal experiments)
- 家畜、産業動物 (farm animals)
- ヴィーガン (veganism) / 菜食主義 (vegetarianism)
- アニマル・ツーリズム (animal tourism)
- 動物の「監禁」(captivity) :
 - 動物園、水族館、闘牛、家畜、ペット (companion animals)
- 動物と法 (animals and law)
- 動物と災害 (animals and disasters)
- 動物と気候変動 (animals and climate change)
- 動物とジェンダー (animals and gender)
- エコフェミニズム (ecofeminism)
- 種差別 (speciesism)

アニマル・スタディーズと文学研究

- 比喩、擬人化、諷刺
 - 動物による語り
 - 動物の表象、イメージ
 - ジャンル: 童話、児童文学、ファンタジー、SF
-
- ✓ ジャック・デリダ (Jacques Derrida, 1930-2004)
 - ✓ ピーター・シンガー (Peter Singer, 1946-)
 - ✓ ダナ・ハラウェイ (Donna Haraway, 1944-)
 - ✓ J・M・クッツェー (J. M. Coetzee, 1940-)
 - ✓ フランツ・カフカ (Franz Kafka, 1883-1924)

➤ 文学は動物の表象を可能にするものであり、人間と動物について考えるために、科学とは異なる方法で多くの素材を提供する

アニマル・スタディーズと文学研究

- 西欧思想を基盤とするアニマル・スタディーズの理論が、日本の動物の事例を考察する際にどのように適用されるか
- 比喩や表象が、動物に対する誤った知識や認識を植え付けかねない
- 文学・文化研究が、動物の保護や環境破壊といった社会問題にいかに関与していけるか

本日の模擬講義の内容

1. 文学研究と動物:

アニマル・スタディーズの概要

2. 動物から読み解く日本文学:

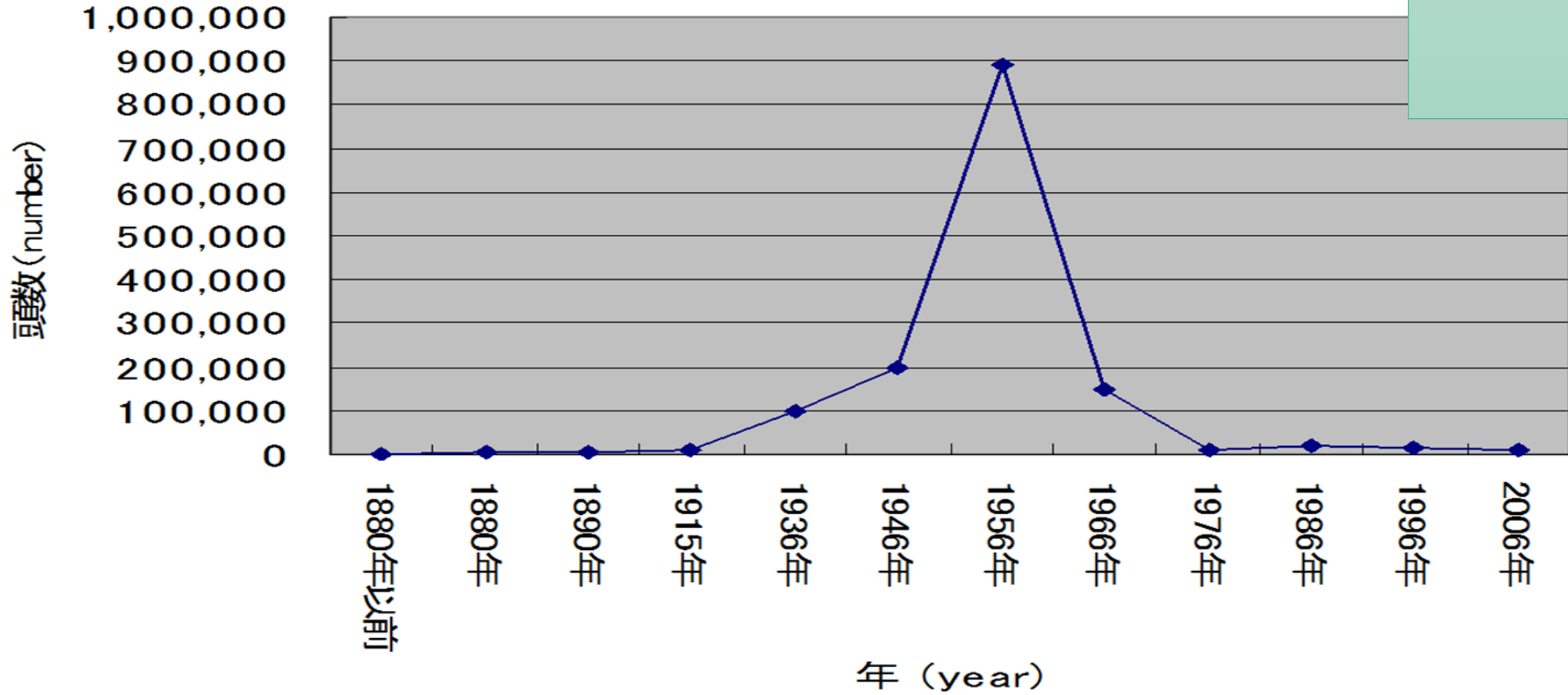
夏目漱石『三四郎』に描かれた羊

質問

みなさんは羊に関して
どのようなイメージが
ありますか？

日本における羊の歴史

めん羊飼育頭数の推移 (Number of Sheep in Japan)



羊をめぐる未来開拓者共働会議『羊は未来を拓く:記録集・羊シンポ'89・盛岡』
(農業山漁村文化協会、1990年)をもとに作成

村上春樹

『羊をめぐる冒険』(1982)

明治まで、殆んど日本人は羊という動物を見たこともなければ理解もできなかったということになる。十二支の中にも入っている比較的ポピュラーな動物であるにもかかわらず、羊がどんな動物であるかということは、正確には誰にもわからなかった。つまり、竜や獺と同じ程度にイマジナティブな動物だったと言ってもいいだろう。

(『村上春樹全作品 1979～1989②』講談社、1990年、146頁。下線部は引用者による)



https://www.shinchosha.co.jp/haruki_murakami/author.html

村上春樹

『羊をめぐる冒険』(1982)

そして今日でもなお、日本人の羊に関する意識はおそろしく低い。要するに、歴史的に見て羊という動物が生活のレベルで日本人に関わったことは一度もなかったんだ。羊は国家レベルで米国から日本に輸入され、育成され、そして見捨てられた。それが羊だ。戦後オーストラリア及びニュージーランドとのあいだで羊毛と羊肉が自由化されたことで、日本における羊育成のメリットは殆んどゼロになったんだ。可哀そうな動物だと思わないか？ まあいわば、日本の近代そのものだよ。(146頁)

夏目漱石

『三四郎』(1908)

- 1908(明治41)年、『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』に連載
- 熊本から上京し大学に通う三四郎と、美禰子、野々宮たちの男女間の関係
- 明治の新しい思想に触れた若者像
- 前期三部作(『三四郎』・『それから』・『門』)



<https://www.shinchosha.co.jp/writer/2374/>

夏目漱石『三四郎』(1908)

「こんな顔をして、こんなに弱つてゐては、いくら日露戦争に勝つて、一等国になつても駄目ですね。[中略]あなたは東京が始めてなら、まだ富士山を見た事がないでせう。今に見えるから御覧なさい。あれが日本一の名物だ。あれより外に自慢するものは何もない。所が其富士山は天然自然に昔からあつたものなんだから仕方がない。我々が拵へたものぢやない」と云つて又にや／＼笑つてゐる。三四郎は日露戦争以後こんな人間に出遭ふとは思ひも寄らなかつた。どうも日本人ぢやない様な気がする。

(『漱石全集 第五巻』岩波書店、1994年、291頁)

夏目漱石『三四郎』(1908)

「然し是からは日本も段々発展するでせう」と弁護した。すると、かの男は、すましたもので、

「亡びるね」と云つた。熊本でこんな事を口に出せば、すぐ擲ぐられる。[中略]

「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より……」で一寸切つたが、三四郎の顔を見ると耳を傾けてみる。

「日本より頭の中が広いでせう」と云つた。「囚はれちや駄目だ。いくら日本の為めを思つたつて鼻屑の引き倒しになる許りだ」

此言葉を聞いた時、三四郎は真実に熊本を出た様な心持ちがした。(292頁)

夏目漱石『三四郎』(1908)

● 解釈の糸口としての羊

「迷子の英訳を知つて入らしつて」

三四郎は知るとも、知らぬとも云ひ得ぬ程に、此問を予期してゐなかつた。

「教へて上げませうか」

「えゝ」

「迷へる子[ストレイ、シープ]——解つて？」[中略]

迷へる子といふ言葉は解つた様でもある。又解らない様でもある。解る解らないは此言葉の意味よりも、寧ろ此言葉を使った女の意味である。三四郎はいたづらに女の顔を眺めて黙つてゐた。(417-418頁)

夏目漱石『三四郎』(1908)

号鐘が鳴つて、講師は教室から出て行つた。三四郎は印気の着いた洋筆を振つて、帳面を伏せ様とした。すると隣りにゐた与次郎が声を掛けた。

「おい一寸借せ。書き落した所がある」

与次郎は三四郎の帳面を引き寄せて上から覗き込んだ。stray sheepといふ字が無暗にかいてある。(420頁)

夏目漱石『三四郎』(1908)

「何だこれは」

「講義を筆記するのが厭になつたから、いたづらを書いてみた」

「さう不勉強では不可ん。カントの超絶唯心論がバークレーの超絶実在論にどうだとか云つたな」

「どうだとか云つた」

「聞いてゐなかつたのか」

「いや」

「全然stray sheepだ。仕方がない」(421頁)

夏目漱石『三四郎』(1908)

下宿へ帰つて、湯に入つて、好い心持になつて上がつて見ると、机の上に絵端書がある。小川を描いて、草をもちや／＼生やして、其縁に羊を二匹寐かして、其向ふ側に大きな男が洋杖を持つて立つてゐる所を写したものである。[中略]表は三四郎の宛名の下に、迷へる子と小さく書いた許である。三四郎は迷へる子の何者かをすぐ悟つた。のみならず、端書の裏に、迷へる子を二匹描いて、其一匹を暗に自分に見立て、呉れたのを甚だ嬉しく思つた。迷へる子のなかには、美禰子のみではない、自分ももとより這入つてゐたのである。それが美禰子の思はくであつたと見える。美禰子の使つたstray sheepの意味が是で漸く判然した。(426頁)

夏目漱石『三四郎』(1908)

やがて唱歌の声が聞へた。讚美歌といふものだらうと考へた。締切つた高い窓のうちの出来事である。音量から察すると余程の人数らしい。美禰子の声もその内にある。三四郎は耳を傾けた。歌は歇んだ。風が吹く。三四郎は外套の襟を立てた。空に美禰子の好きな雲が出た。

かつて美禰子と一所に秋の空を見た事もあつた。所は広田先生の二階であつた。田端の小川の縁に坐つた事もあつた。其時も一人ではなかつた。迷羊[ストレイシープ]。迷羊。雲が羊の形をしてゐる。(602頁)

夏目漱石『三四郎』(1908)

「ヘリオトロープ」と女が静かに云った。三四郎は思はず顔を後へ引いた。ヘリオトロープの罫。四丁目の夕暮。迷羊。迷羊。空には高い日が明らかに懸る。

「結婚なさるそうですね」

美禰子は白い手帛を袂へ落した。(604頁)

「どうだ森の女は」

「森の女と云ふ題が悪い」

「ちや、何とすれば好いんだ」

三四郎は何とも答へなかつた。たゞ口の内では迷羊、迷羊と繰り返した。(608頁)

夏目漱石『三四郎』(1908)

- 『三四郎』連載時の挿絵(『東京朝日新聞』)



1908(明治41)年10月26日第5面



1908(明治41)年10月29日第3面

夏目漱石『三四郎』(1908)

● 解釈の糸口としての羊

◆ キリスト教との関連に基づいた解釈

- 『新約聖書』マタイ伝第18章12節:「迷い出た羊のたとえ」
 (“The Parable of the Wandering Sheep”)
- 羊: 犠牲、神の保護を必要とする無垢な存在

◆ 日本における羊の歴史と明治時代の状況

- 間接的で限られた情報、空想上の動物
- 作品中横溢するカタカナ語と同様に、新しく異質なものとして受容される

夏目漱石『三四郎』(1908)

● 解釈の糸口としての羊

◆ 夏目漱石の英文学研究

● 東京帝国大学での英文学の講義

『文学論』(1907)、『文学評論』(1909)、『英文学形式論』(1924)

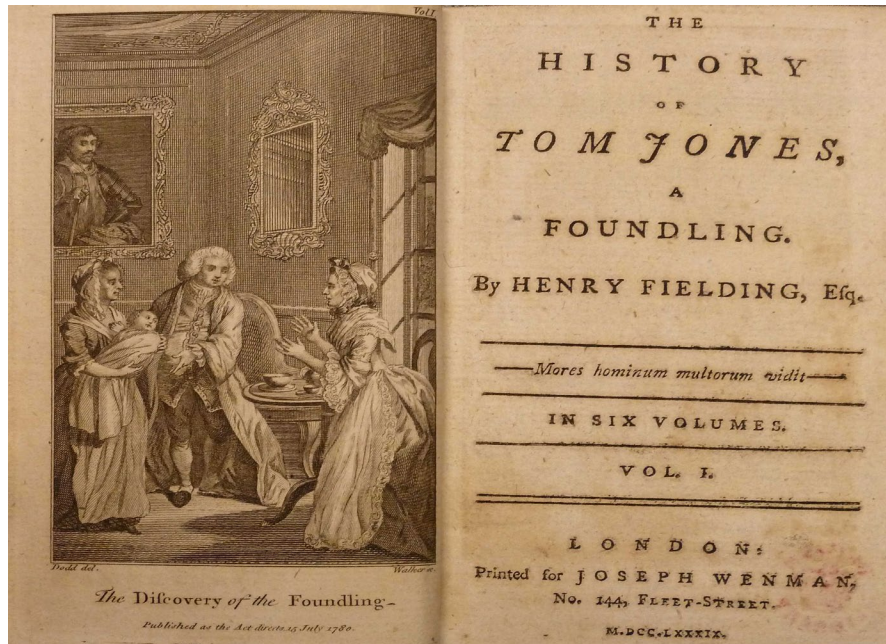
● ヘンリー・フィールディング『トム・ジョウズ』(1749)と『三四郎』の類似

◆ 「墮落女学生」としての美禰子

● 明治30年代: 女学生文化の発展と新聞メディア

● 「新しい女」としての美禰子 ⇔ 男女関係における奔放さ

ヘンリー・フィールディング『トム・ジョーンズ』(1749)



<https://www.bl.uk/learning/timeline/item126702.html>

And consider, sir, on my behalf, what is in the power of a woman stripped of her reputation and left destitute; whether the good-natured world will suffer such a stray sheep to return to the road of virtue, even if she was never so desirous.

(Henry Fielding, *Tom Jones*. Oxford UP, 2008, p. 837)

日本近現代文学における 羊の表象

- 羊は牧畜・放牧地域の生活形成に大きく関与してきたが、日本では明治時代以降、欧化政策の一環として輸入された
- 近代以前には想像上の生き物として表されていたが、西欧文化の流入や文学作品の翻訳により、従順・無垢・犠牲といったイメージが広まっていった
- 物理的に不在であるか、または遭遇の機会が限定されているために、日本における羊の表象は社会状況に影響を受けた想像力によって構築されてきた
- 西欧文化における羊の表象の意義がそのまま用いられてはならず、各時代の羊についての認識や緬羊飼育の状況が投影されている

「世界文学と日本文学」(2年次対象)

授業内容

- アニマル・スタディーズの研究の歴史
- ピーター・シンガー『動物の解放』(1975)
- ベジタリアン／ヴィーガンの思想と実践
- J・M・クッツェー『動物のいのち』(1999)
- フランツ・カフカ「ある学会報告」(1917)
- 宮沢賢治「フランドン農学校の豚」(1934)
- 東日本大震災後の文学と動物
- 期末レポート(動物に関する作品の創作)

➤ 文学作品を講読し、文学・文化を人と動物の関係から考察する

主要参考文献

- ・ アダムズ、キャロル・『肉食という性の政治学：フェミニズムーベジタリアニズム批評』鶴田静訳、新宿書房、1994年
- ・ 有山輝雄「明治末期の新聞メディアと漱石」小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第5号、翰林書房、1995年11月、86-97頁
- ・ 伊勢田哲治『動物からの倫理学入門』名古屋大学出版会、2008年
- ・ 佐伯順子『「色」と「愛」の比較文化史』若草書房、1998年
- ・ 佐々木英昭編『異文化への視点』名古屋大学出版会、1996年
- ・ 本田和子『女学生の系譜』青土社、1990年
- ・ 山根章弘『羊毛文化物語』講談社、1989年
- ・ DeMello, Margo. *Animals and Society: An Introduction to Human-Animal Studies, 2nd ed.* Columbia UP, 2021.
- ・ Gruen, Lori, ed. *Critical Terms for Animal Studies.* U of Chicago P, 2018.
- ・ McHugh, Susan, Robert McKay and John Miller, eds. *The Palgrave Handbook of Animals and Literature.* Palgrave Macmillan, 2018.
- ・ Ortiz-Robles, Mario. *Literature and Animal Studies.* Routledge, 2016.
- ・ Rothfels, Nigel, ed. *Representing Animals.* Indiana UP, 2002.